

ハマシギ *Calidris alpina* の越冬群

【選定理由】

藤前干潟および庄内川河口周辺、境川から矢作川および矢作古川周辺、汐川干潟、伊川津干潟および福江湾周辺のハマシギの越冬群は、全国有数あるいは本州最大級の規模であり、本種の国内における生息状況を鑑みて、特に保全に対する配慮が必要な地域個体群といえることができる。個体数そのものは多いが、生息条件の悪化により急速に数が減少する可能性がある。

【形態】

全長 16～22cm、翼広長 28～45cm。夏羽は、頭頂と上面は赤褐色で黒褐色の斑が散在し、顔と後頸は白っぽく胸に細かな黒褐色の縦斑があり、腹には大きな黒色斑がある。冬羽は、頭頂、後頸から上面全体にかけて一様な灰褐色で、喉から胸、腹にかけて。幼羽はやや夏羽に似るが、淡褐色の雨覆の羽縁が明瞭で、肩羽の黒褐色の軸斑が大きく、腹に黒色斑が点在する。嘴は長めでやや下に曲がり、飛翔時は風切羽に白帯がでる。



愛知県知多郡東浦町, 1990年11月11日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシアおよび北アメリカの北極海沿岸で繁殖し、中国南部、中東、地中海沿岸、北アメリカ東部および西海岸などで越冬する。6亜種に分けられる。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、本州以南で越冬する。

県内では、冬期および春と秋の渡り時期、に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟や河川、水溜まりなどに生息する。春期と秋期は、渡り途中と考えられるものも加わり、数が増加する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期は、干潟や河川などに群をなして生息し、ゴカイ類や甲殻類を捕食する。ジュージューリと鳴く。春期は水田などの淡水湿地、秋期は埋立地の水溜まりなどにも渡来し、内陸部の河川で小さな群が見られることもある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

近年に行われたシギ・チドリ類の全国調査によると、冬期(12～2月)の観察最大数の合計が30箇所で28,941羽(環境庁, 2000)となっている。

本州以北で冬期に本種のまとまった群が見られる地域は、東京湾(千葉県)、伊勢湾・三河湾にほぼ限られる。県内では、藤前干潟・庄内川河口周辺で約2,000羽(ごく近年まで約5,000羽が越冬しており、近隣地区に一時的に移動している可能性がある。)境川河口および矢作川河口で約500～1,000羽、汐川干潟で約2,000羽、伊川津干潟および福江湾周辺で約800羽が越冬している。

矢作川河口周辺では、1980年代始めまでは約2,000～3,000羽が見られたが、それ以降、著しく減少した。藤前干潟・庄内川河口周辺でも減少している可能性がある。干潟の減少など、生息条件の悪化により、急速に数を減らすおそれがある。

【保全上の留意点】

採餌場所としての干潟を保全するとともに、干潟が水没した時などに退避できる場所(ねぐら)の確保・創出に努める必要がある。干潟性鳥類の代表種であり、継続的に調査を行い生息状況を把握することが望ましい。

【引用文献】

環境庁, 2000. 平成11年度冬期シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査報告書 速報, pp.15-25. 東京.

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.208-209. 文一総合出版, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 1998年春, pp.10-34. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.